
わりとフリーダムなオッサンの物語

青年 T

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

わりとフリーダムなオッサンの物語

【Nコード】

N9307X

【作者名】

青年T

【あらすじ】

なんかいきあたりばったり過ぎたのでプロットから練り直して出直します。

オッサンと少女との出会い

少女は走っていた――

息も絶え絶えに、足を縛れさせながら――

少女は逃げていた――

背後を追ってくる無数の足音から――

少女は絶望していた――

逃げながらも逃げきれぬわけがないと――

そんな少女の逃げた先にいたのは一人の男だった――

街道を一台の馬車が走っている。

ダリス共和国首都アークノリンと港湾都市ベルノイアを繋ぐこの街道は利用者が多いためにそれなりの整備がなされ、馬車に乗っていても感じる揺れというのは少ない。

馬車の外は春の澄んだ空気と温かな日差しが差している。

だと言うのに馬車の中は日の光が一切入っておらず、また、外の空

気とは真逆に空気はどんよりとしている。

中にいるのは全て若い年頃の女性であり、全員が薄汚れた衣装に身を包み、首輪と手錠を嵌めている。

それは奴隷の証。正確に言えばこれから売りに出される女性の証だ。馬車内にいる女達は全員がこれから首都で売りに出される運命を持つている女達だ。

女達は皆その目に生气というものを宿していない。

当たり前だ。

彼女達に待っているのは金を持つ男達に買われ、その情欲を解消するための道具となる運命しかない。

そんな女性達の中にその少女はいた。

名をルヴィといい、年齢は十七。長い朱色の髪は手入れなどされておらずボサボサで、肌は妙に青白い。髪の間から覗く顔立ちは酷く腫れ上がり元の顔立ちを窺い知ることとは出来ないが、その顔に宿る生気のなさだけは他の女性達と同じく感じる事ができる——そんな少女だ。

彼女は他国であるグリストワール王国のどこかな村で暮らしていた農夫の一人娘だったが、人攫いにあい奴隷として売り払われた少女だ。

人攫いと言っても、ただ略奪し凌辱するだけの目的で人を攫う者もいれば奴隷として売る人材の確保のためにその行為を犯す者もいる。彼女の場合は後者であるが、攫った者が言うことを聞こうとしない彼女を教育するという名目で暴力を振るった。

何度も何度も殴られた影響でその精神はすでにボロボロで、話し掛けても最低限の反応を示すだけの人形でしかない。

彼女を買った商人も彼女のそんな姿を見て人間の買い取り額からすると二束三文とも言える安値で彼女を購入していた。

これで高く売ることが出来るのなら商人としては嬉しいことこの上ないのだが、よほどの幸運でもない限りちよつとした小遣いくらい

の利益しか生まれない。だが、世の中には女性を殴ることに至上の喜びを見出だすような変態も存在し、商人自体もそういう顧客を知っている。その人物にそういう行為専門の奴隷として売ることが出来ればそこその値段で売れるのではないかという打算も商人の胸のうちにはあった。

斯くして商人が御者をし、奴隷の女達を乗せた馬車は進んでいく。

しかし、アークノリンとベルノイアのほぼ中間辺りまで来たところでどうもきな臭い匂いを感じてくる。

不穏な空気が辺りから立ち込めてくるのを感じ、商人は馬車を心なしか急がせる。

しかし、そんな商人の行為を無駄にするように街道の横にある丘から無数の存在が立ち上がる。

その姿は漆黒。黒い衣服に身を包み、顔を黒い布で覆った存在。それが目に入るだけでも三十はいると理解した商人は己の不運を悟る。彼らもしくは彼女らかもしれないが、商売を営む商人達が商品を運搬する際に最も恐れるのは商品を問答無用で奪っていく盗賊という存在だ。

彼らは国から兵が出兵したり、民間の冒険者という存在が依頼を受けて討伐しようともすぐに沸いて来る。

商人はつい半月ほど前に国による盗賊の討伐が成されたと聞いて金をケチって護衛を雇うことなく街道を進んでいた。

そのために新たに沸いて来た盗賊に襲われるという運命に辿り着いたのだ。

それを悟りつつも商人は馬車を全速力で走らせる。まだ道のりは半分もあり、馬を潰してしまうわけにはいかなかったが、盗賊による略奪に遭遇した商人で生き残った者などほとんどいないと知ってい

る商人からすれば逃げるのが先決なのだ。

だが、そんな商人の向かう運命の先は自身の破滅でしかなかった。商人の馬車が進んだ先にはあらかじめ先回りして道を塞いでいた盗賊の仲間達がいた。

盗賊を確認した商人は馬車のスピードはそのままに突っ切ろうとしたが、盗賊の一人が進みでて右手を商人の馬車に翳すと同時にそのスピードを緩めてしまう。

「ギフトか！」

商人が悔しげに呟く。

ギフト

それは世界に住む誰もが持っている物。

ギフトは人によって様々な物があり、その中にはレアギフトと呼ばれる使い方次第では神の領域すら踏み込んでいく物もある。

盗賊が使用したギフトは『フレンドリアニマル動物の友』というギフトだ。このギフト

は動物の言葉のある程度理解することが出来、なおかつ無条件に動物に好かれる。これ自体は珍しいギフトというわけでもなく、世界中にいる動物に関わる仕事をしている者のおよそ半分が持っているギフトだ。

だがしかし、そんな珍しくもないギフトも盗賊の仲間が持っているれば襲撃する馬車が逃げる行為を阻止するためにはこれほど効果的なギフトはない。

「くそっ！」

商人は舌打ちを一つ打つ。

そして次に自分が助かる道を懸命に模索する。

といっても取れる選択肢は一つしかない。商人には商品や自身の身につける金品を盗賊に譲渡して惨めに命乞いするしか助かる道はない。

馬車を止めた商人は手を挙げて降伏をアピールする。すると盗賊達が続々と馬車の周りに集まってきた。

「こ、殺さないでくれ……商品はやるっ！ ほらっ、私の全財産もやるからっ！」

商人は懷をまさぐり、金貨や銀貨の詰まった小袋を盗賊に投げ渡す。盗賊の一人がそれを広い上げ、中身を確認すると小さく頷いた。

「殺せ」

そして盗賊のリーダーであろう、大柄で筋骨隆々の男が商人にとっては死刑宣告を告げる。

「ま、まてっ！ 金はやっただろう。それに商品もやったじゃないか。命をとることはないだろう？」

商人にとっては首都にある自身の店に行けば残している金があるために自分の命を買うには安いと思いいつさりと渡した金。しかし、結果は変わらない。

「このままお前を見逃せば、首都から兵なり冒険者なりがやってくる。そんなことになるわけにはいかんからな」

「言わないっ！ 絶対に言わないから助けてくれっ！」

「他人が言う言葉に絶対はねーよ」

無様に命乞いをする商人に無慈悲にも盗賊のリーダーの言葉が告げられる。それと同時に彼の部下によって振り下ろされた凶刃によって商人の首が落ちた。

「さて……」

盗賊のリーダーは馬車の後ろに回り、馬車の扉を開く。そこに居るのは年頃の娘達。

ほとんどの者が開かれた扉を見つめていた。

外での出来事は音でしか知る術はないが、彼女達は大体の事情を把握していた。

しかし、彼女達の態度に恐怖というものはそれほど浮かんていない。奴隷になった者はどんな扱いをされても文句を言うことが出来ない。いや、その権利がない。

世界における共通の法律の一つである奴隷法により、最低限の食事と命だけは保証されているが、そんなものは家畜に対する物と同じだ。実際、奴隷とは人間という種の家畜である。

ならば彼女達にとっては金で買われて酷い扱いを受けるのも、賊にさらわれて酷い扱いを受けるのも変わらない。むしろ用済みになったら殺してくれるだけ賊の方がありがたいのかもしれない。

「一、二、三……十三。まあ、そこそこの成果かな。よし、リッド、てめえに一人はくれてやる。俺の次に選んでいいぞ」

「まじっすか！？ やりー」

盗賊のリーダーに声をかけられたのは先ほどギフトを使い馬車を止めざるを得なくした者だった。

「とりあえず全員外に出ろ」

その言葉に促されるように一人、また一人と立ち上がり、外へと出てくる。

しかし、その中で一人だけ立ち上がらない者がいた。ルヴィだ。彼女だけは人形のように動こうとしない。それを見たリーダーは痺れを切らしてルヴィの髪を引っ張るようにして外に引きずり出そうとする。

そしてリーダーがルヴィの髪を掴んだ瞬間に人形だったルヴィに人形にならざるを得なかった出来事がフラッシュバックする。

「いやっ！」

脳裏をよぎった暴力行為に対してルヴィは反射的にリーダーの手を振り払う。

「つつ！」

リーダーは右手に走った軽い痛みで顔をしかめ、次いで苛立ったように顔に怒りを浮かべる。

「来いっ！」

そして無理矢理にルヴィの髪を掴み、馬車から引きずり落とす。

「いやっ！ いやーっ！」

暴れるルヴィに対してリーダーはすでに馬車から降ろしたと言うにも関わらずルヴィを地面に引きずりながら歩く。そしておもむろに手を離すとその手をルヴィのボロボロの服にかけて力任せに引き裂いた。

「てめえは俺に傷を負わせた。だからアジトには連れてかねえ。一発ヤツた後でぶち殺してやる」

振り払った手がたまたまりーダーに当たった。ただそれだけでルヴィは殺される。

奴隷となった者の命は盗賊である彼にとってはとてつもなく軽い。奴隷と言うものは、金を持つ者のステイタスとして需要が増えることはあっても減ることのない商品だという言葉がある。

特に首都であるアークノリンは貴族や力のある商人の本宅などがあり、その需要は国の中では最も大きい。ならば彼らがここらを縄張りとしている限り次の獲物はすぐにかかる。

「へへっ……乳はでかくもなけりや小さくもねえ中途半端なもんだな。ま、楽しもうとは思ってねーけどな」

ルヴィの胸に手を乗せたりーダーはその指を細かに動かしながら呟く。その声は小さかったが周りにいる部下達には聞こえたようで口々にずるいやら自分もやりたいなどという声が聞こえてくる。しかし、りーダーはその声をあえて無視する。集団でルヴィを凌辱するのもいいが、まずは自分が一人で。そんなどうしようもない思いからだ。

「いやっ……いやっ！」

「暴れんな、このっ！」

りーダーがなおも暴れるルヴィの顔を殴りつける。その一撃は暴れているとはいえ、マウントポジションをとっている女性に向けるような威力ではない。筋肉の鎧に覆われたりーダーのほぼ全力に近い一撃にルヴィの意識が飛びかける。しかし、さらわれた当初に散々

殴られた経験のあるルヴィは痛みに慣れてしまったのかそれでも意識を失うことが出来なかった。

そしてその一撃が喚起剤としてルヴィの更なる抵抗を呼び起こした。

「くそつ、暴れんなつて！」

「いやっ！」

「はうっ！」

それは偶然だったのだろう。

たまたま上がったルヴィの膝が彼女を押さえ付けようと両腕を掴んで地面に押し付けたリーダーの下半身に当たったのは。

そして、ルヴィを押さえ付けるために腰が浮き上がっていたために大事な部分へとクリーンヒットしてしまったのは――

下腹辺りからの鈍く鋭い痛み。それは悲鳴すらあげることが出来ないほどのもので、彼の視界が白く染まる。

そんなリーダーの様子を目の前で目の当たりにし、なおかつ腕を押さえ付けるリーダーの腕が彼の股間を押さえる役目にクラスチェンジしたことにより、ルヴィはリーダーを押しつけてそこに背を向けて走り出す。

なぜそうしたのかは彼女にもわからない。だが、壊れたはずの精神のカケラが彼女に今のうちに逃げると囁いたのだ。森に向かって走れと続けざまにカケラが言う。それに従ってルヴィは走る。

走り出したルヴィの背を見ていた盗賊は少し遅れてそれに反応する。リーダーを襲った災難は目撃した男達を内股にするほどの衝撃だった。それは男ならば、そしてあの痛みを知るものほど顕著にあらわれていた。

「に、逃がすなっ！」

盗賊の内の誰かが叫ぶ。

その声に反応して盗賊達は皆ルヴィを追いかける。

しかし……

「待てっ！ 他の奴隷も逃げ出したぞっ！」

咄嗟に全員が動いてしまったことで他の奴隷達の女達を見る者がいなくなってしまう。

それを見た一人の女が動き出すとそれに触発されるように他の女も動き出す。

それに気付いた一人の盗賊がルヴィを追って走り出した仲間達を呼び止める。

やむなく先頭を走る数人をそのままに他の盗賊達は逃げ出した他の奴隷達を捕まえるために方向を転換した。

森の中に入ったルヴィが走って走って走り抜いた先に少し拓けた場所があった。

その中央辺りには大きな切り株があり、そこに一人の男が腰掛けて、空を見ながら紫煙を吐き出していた。

ルヴィ以上にボサボサの髪はくすんだ黒で、オシャレなどではなく明らかに切るのが面倒だという感じに伸び放題だ。口周りと同様にヒゲがボサツと伸びている。男が身に纏う衣服は薄汚れていて見るからに不潔だった。

不意に男とルヴィの視線が重なる。

それと同時に背後の足音がすぐ近くまでやってくるのを感じたルヴィは男の方に近寄った。

「え……なに、痴女？」

男が困惑したような声を発する。

その声にルヴィは自分が今どんな格好をしているのか思い出したが、恥ずかしがるそぶりも隠す仕草も見せなかった。

「……たす……けて……くだ、さい」

息も絶え絶えにルヴィは言葉を搾り出す。
藁にも縋る思いだった。

本来の彼女であれば無関係の人物を巻き込むなんてせず、身を翻していたに違いない。

しかし、彼女の精神のカケラが囁くのだ。

この男に助けを求めよと。

「……………」

ルヴィの言葉に男は答えない。

その視線はルヴィの顔に固定したままだ。

その瞳は女性でありながら長いこと手入れのされていない髪やさきほど殴られたことにより一段と腫れ上がった顔を視界に捉えている。

「……よろしい。オッサンに任せなさい」

そう言って男が立ち上がる。

その直後、森の中から肩で息をしている数人の盗賊達が出てくる。

「よう、やっと、追いついたぜ」

「手間あ、かけさせて、くれやがって……」

「うわぁ……肩で息しちゃってるよ。えらい興奮してんのね。ロリコン？」

そんな盗賊達を見つめながら男がその場にいる全員に聞こえるように言う。

そこでようやく盗賊達はルヴィの立つ先に男がいることに気付く。

「誰だてめえ？」

「オッサンのこと？ いや、初対面だから自己紹介しても知らないって言われるオチしか見えないんだけど……」

「誰だって聞いてんだよ！？」

「おお、怒鳴んなよ。オッサンの名前は……ファウストとそこかしこで名乗ってます」

「誰だよ」

「ほらね。オッサンの予想と少し違うけどニュアンスは同じこと言っただけ」

まるでクイズに正解したかのような声をファウストと名乗った男が発する。

盗賊達は何者かはわからないが、馬鹿にされてるような気がして苛立たしげにファウストに告げた。

「その女をこっちによこせ」

それに対するファウストの言葉は常識的に考えれば二通りだ。素直に従うか、正義感ぶって断るか。

だが、ファウストの言葉はそのどちらでもない。

「ところでライテルって右でいいんだよね？」

盗賊達をおちよくっているのか道を聞いたのだ。ちなみにライテルと言つのはダリス共和国の南の方にある都市の名前だ。

「……こつからなら南東方向だ。とゆーか女をよこせっ！ 素直に差し出しゃ、命まではとらねえ」

「南東、というと右斜め後ろか」

「いや、そつちじゃねーよ。なにを根拠に右斜め後ろなんだ……じやなくて女をよこせっ！」

「こらこら。年上っぱい人にそんな口調はいかんよ。オッサンはそういう上下関係的なのが嫌いだからね」

「いいからよこせっ！」

「なにを？」

盗賊の言葉にファウストは小首を傾げて聞き返す。その様子に完全におちよくられてると確信した盗賊達は剣を鞘から抜き放つ。

「……もういい。無理矢理奪うわ」

「あれ、なんで皆怒ってんの？ 若人達、カルシウム不足だぞ」

ファウストの言葉に反応する声はない。しかし、明らかに盗賊達の怒気が強まった。それにやれやれと呟きながら右手を自分の背後へと回す。それと同時にルヴィの前に進み出て彼女と盗賊達の間に割って入る。

ファウストが右手に回した手が何かを掴む。その手に掴んだ物を強く握る。ファウストの腰には一振りの細く短い剣が携えられていた。彼がそれを抜くと白刃に煌めく刀身があらわになる。

それは小太刀と呼ばれる武器。だが、今この場にそれを知る者はい

ない。

小太刀は所有者と反するようにとても美しかった。

「オッサンに刃を向けた以上君達は敵だよ？」

「偉そうに……上から物を言ってるじゃねえっ！」

たった一人を相手にその場にいた盗賊達が全員でファウストにかかっていた。

ルヴィは盗賊達がファウストに切り掛かった瞬間に瞼をギョツと強く閉じていた。

なぜだかファウスト自身も妙に自身を見せていたが、ルヴィ自身のせいでファウストと名乗る男が酷い目に合うかもしれない。そんな想いを浮かべていたのだが、幾度かの怒声などがあつた後、気付けば周りはやけに静かになった。

風によって木々がざわめく他は一切音がない。

「終わったよ」

そんな中に一人の男の声が聞こえる。

ルヴィが目を開けるとそこには血に濡れた刃をそこらに生えてる草で何やら懸命に拭っているファウストと死体となつて転がっている無数の盗賊達の姿があつた。

「あ、草の汁がついた……ま、いつか」

「あ……あの……」

「くんくん……うげ、血の臭いと草の汁の臭いが混じって強烈になつてる……でもなぜだろう。もう一回嗅ぎたくなる。くんくん」

「あ、の……」

「うん？ はいはいオッサンに用事かな？」

「ころ……したの……？」

「オッサン年甲斐もなく調子こいちゃったテヘッ」

ファウストがそう言った瞬間、ルヴィの背筋に薄ら寒い物が走る。

軽い調子で言ったファウストの発言は、その口調とは裏腹に何か触れてはいけない感情があるそんな予感がした。故にこれ以上にそのことに触れることをルヴィはしない。

その代わりに

「たす……けて……くれて……あり、がとつ……ござい、ます」

殴られた影響なのか言葉をうまく紡ぐことが出来ない。そもそも人と会話すること自体が久しぶりと言っている。

そんなルヴィにファウストは告げる。

「さつきから思ってたんだが、若者なら若者らしくハキハキ喋りなさい。オッサンのハッキリしない子は好感度マイナスですよっ！」

この言葉を言ったことを後にファウストは反省し、一人の少女に事あるごとにネチネチと責められることになる。

それは少し先の未来の話。

かくして少女と男は出会った。

オッサンと少女との出会い（後書き）

ただ一人称が『オッサン』のキャラクターを主人公にしたかっただけで衝動的に書いたお話です。

よって世界観とか諸々綻びが出ると思います。ここおかしくね？
と思ったらご指摘してくださると幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9307x/>

わりとフリーダムなオッサンの物語

2011年11月13日08時01分発行